

舞踊文化 ETC

No.32

目 次

- | | | | |
|-----------------|-----------|--------|------|
| ○見るなの禁忌 | ・ ・ ・ ・ ・ | 諏訪 春雄 | —— 1 |
| ○アジアの舞踊、おりふしの想い | ・ ・ ・ | 丸茂 美恵子 | —— 4 |
| ○韓国「恩山別神祭」の花 | ・ ・ ・ ・ ・ | 伊藤 好英 | —— 7 |
| ○民俗芸能のいま | ・ ・ ・ ・ ・ | 齊藤 裕嗣 | —— 9 |

見るなの禁忌

諏訪 春雄 学習院大学名誉教授



黄泉国の通路黄泉比良坂（よもつひらさか）である。島根県東出雲町。イザナギはイザナミを追って黄泉の国に赴く。見るなのタブーを犯してイザナミをのぞき見ると、身体にはうじがわき雷神が化成していた。怒った女神は逃げる男神を追ってヨモツヒラサカに至る。『古事記』・『日本書紀』が記す神話で「見るなの禁忌」を伝える。

「見るなの禁忌」は日本の神話に数多く伝えられている。

宮崎県日南市鶴戸神宮
山幸の妻トヨタマビメがウガヤフキアエズを生んだ地



山幸彦の子を宿したトヨタマビメは出産のために山幸彦のもとを訪れ海浜に産屋を作るが完成前に産気づき、夫に見るなのタブーを課して、ウガヤフキアエズを出産する。夫はその禁忌を破りのぞき見するとトヨタマビメはワニの姿で出産していた。『古事記』・『日本書紀』

民話にも多く伝える。

若者が瑕を負った鶴を助けた。鶴は美しい女となって若者と結婚し、機を織って家は豊かになった。しかし、夫が約束を破って機屋を覗いたために女は鶴となって飛び去った。「鶴女房」「見るなの禁忌」は日本以外にも伝わる。代表的な例話を記す。

中国の例話 たにし女房



晋の安帝の時代の人謝端は両親を失い、隣人に養育されたが、非道をしない立派な若者に成長した。あるとき、大きいたにしを見つけ、家に持ち帰って、甕（かめ）のなかに入れて置いた。働きに出てもどると、飯や湯の支度が出来ていた。不思議に思い、次の日、外から窺っていると、一人の少女が甕の中から出て働きはじめた。驚いた若者がとがめると、「わたしは天の河の神女白水素女（はくすいそじょ）です。天帝があなたをあわれんで、わたしを派遣したのです。十年のうちにあなたを富ませ、わたしは帰るつもりでしたが、あなたはわたしの正体を見てしまいました。もうここにとどまることは出来ません。この殻を残して行きますから、これに米穀をたくわえて置けば、貧しくなる事はあ

りません」。そういい残すと、にわかに風雨が起り、彼女は消えた。謝端はそののち豊かに暮らすことができた。『搜神後記』「白水素女」六朝時代

ギリシア神話「パンドラの箱」



ギリシアの神ゼウスは、巨人のプロメテウスに「粘土で、我々と同じ姿をした生き物を作れ」と命じた。プロメテウスが生き物を作ると、ゼウスは命を吹き込んで人間と名付けた。次にゼウスは、プロメテウスに「人間に知恵を授けてやれ。ただし、火を使う事を教えるな。火は、我々神々だけの力。人間に火を使う事を教えると、我々の手におえなくなるかもしれん」と命じた。

こうしてプロメテウスは、人間に家や道具を作る事、穀物や家畜を育てる事、言葉や文字を使う事などを教えた。さらに火のない人間に同情し、太陽から盗み出した火を人間に与えた。そのため、怒ったゼウスに山につながれて、

鷲に食い散らされた。続いてゼウスは、職人の神へパイストスに命じて、この世で一番美しいパンドラを作らせると、プロメテウスの弟エピメテウスの許へ送った。

エピメテウスの家には、プロメテウスが残していった黄金の箱があった。中には、病気、盗み、ねたみ、憎しみ、悪だくみなど、この世のあらゆる悪が閉じ込められてあった。パンドラはこの箱に興味を持ちエピメテウスの制止をふりきって開けさせた。そのとたん、箱の中からあらゆる悪が、人間の世界に飛び散った。箱のなかには希望だけが残った。

西欧型・中国型と比較した日本の特色

○見られることが「恥」という意識と鶴女房・見るなの座敷などの話型に顕著な「哀感＝情」は日本独自。→日本の恥と情の文化

○神の戒めに背くという「罪と罰」という意識は乏しい。→西欧の罪と罰の文化

○中国の天帝や神女の関与は中国型罪と罰

○新しい秩序が始まるという「分節」の機能も日本に顕著である。→日本特有の新しい機能

日本人は、幽暗の場所に籠って神と交流し新しい生命を得て再生する信仰を持っている。そのときに接触する神は地母神が原型であり、のちに多様な神仏に信仰が拡大した。

日本の「見るなの禁忌」は日本人の伝統的な生命更新方法の一つの型として理解できる。男性主人公が覗き見る女性は地母神またはその眷属神であり、その行為によって個人または集団環境に大きな変化が起こり、新しい文明が始まる。日本の乏しい文明開始神話の機能をも「見るなの禁忌」が果たしてきた。そして、《恥と情》という日本人の国民的心情をもっともよく表現している伝承もまた日本の「見るなの禁忌」である。

アジアの舞踊、おりふしの想い ～カンボジア 芸能の伝承と記録～

桜美林大学特任教授 丸茂 美恵子

私のアジアとの交流が中断して約4年半になる。本誌シリーズでは私の経験に基づいたアジアの雑感を綴っているが、書きそびれた話題はないかと今一度振り返ってみると、カンボジアでの貴重な体験を話していなかった。今から15年ほど前の話だが、お読みいただければ幸いである。

○クメール芸術アカデミーにおける猿役の芸の伝承

NPO 法人クメール芸術アカデミーについては、『民族舞踊文化No.21』(2009)でその素晴らしい環境に言及し、『舞踊文化 ETCNo.29』(2020)で「モコー」の珍しい練習風景を紹介しているので、それらを参照していただきたい。

そのアカデミーは、同じ敷地内に稽古場とは別棟の事務所兼研究所が建っている。その建物の中にアーカイブズの部屋があり、過去の猿役の名人の写真が飾られていた(裏表紙の写真参照)。その名人の弟子がアカデミーの女性教師の一人で、彼女は猿役を担う団員に熱心に稽古をつけていた。その写真と稽古の光景を見て、私は代々にわたる技の伝承を大切にする気持ちは日本の伝統芸能と同じなのだと驚嘆したのだった。



〈左〉見学ができる稽古場 〈右〉猿役名人の弟子の教師(中央立ち姿)が団員に猿役の技を伝授



〈左〉事務所兼研究所の建物 〈右〉玄関前(左より)小林直弥日本大学教授、スタッフ、オーナー、筆者



〈左〉アカデミーの建物と道を隔ててオーナーの邸宅がある 〈右〉(左より)オーナー、夫人、通訳、筆者

○王立プノンペン芸術大学(造形芸術系)で絵を描く学生

フランス植民地時代に発展した街の、トンレサップ川沿いにあるカンボジア王宮。私たちは王宮を見学した後、近くの王立プノンペン芸術大学のキャンパスにふらっと立ち寄った。『舞踊文化 E.T.CNo.19』(2010)と『舞踊文化 ETCNo.29』で述べたように、上演芸術系(舞踊・演劇・音楽・サーカス)の学科は劣悪な環境のバンサヤーという地に移転させられてしまったが、そこには造形芸術系が残っていた。ユネスコ・プノンペン事務所から私が紹介いただいた正式な視察先は舞踊科なのでバンサヤーのキャンパスだが、その日、通りかかった女子学生に通訳のブンティさんが声をかけ、彼女らが案内をしてくれたのだった。それが、帰国後の私にとって重大な展開になるとはつゆ知らずに…。

キャンパス内の或る教室で6、7名の学生たちが集まって似顔絵を描いていた光景が今でも忘れられない。机の上をよく見ると絞り切った絵具ばかり。それらをさらに絞り出して絵を描いていたのだ。ここだけではない。他の教室でもデッサンのためのトルソが一体のみ。それも美術だけではなく、翌日、バンサヤーのキャンパスを訪問すると、音楽教室にはピアノが1台だけで、案内役の演劇科の教員は「日本の企業が寄贈してくれたのだ」と私たちに感謝した。王立プノンペン芸術大学の二つのキャンパスを視察した経験を通して、私は芸術を育むための教材や道具が不足している状況に唖然としたのである。



〈左〉王立プノンペン芸術大学キャンパス 〈右〉クリスマスなので授業はなく学生たちもまばら



〈左〉似顔絵を描いていた学生たちがいる教室 〈右〉似顔絵を持っているのが通訳のブンティ氏

○日本大学芸術学部で出来る支援の形は何か？

そこで、私は帰国してすぐ、当時の勤務先であった日本大学芸術学部の野田慶人学部長(当時)に「アンコールワット遺跡の保存修復に上智大学や早稲田大学などが取り組んでいる。芸術学部でも芸術教育の面でオフィシャルに支援していただけないか」とお願いしたところ、学部長は「そうしよう。しかし、大学が取り組むには各大学のテリトリーがあるだろうから、ユネスコ・プノンペン事務所に何をしたらよいか、尋ねて欲しい」とのこと。さっそく、私はプノンペン事務所長の神内輝夫氏にその旨を相談した。返ってきた答えは私の予想外の話で、「芸能の映像記録を撮って欲しい。現地の人々はアーカイブズがどんなに大切なことかまだ理解が足りないのだ」と。この提案について、学部長は「芸術学部には映画学科も放送学科もあるから、若い先生たちを派遣しよう」とまでおっしゃってくださいました。しかし、当時、隣国のタイの政情がとても不安定であったため、残念なことにその計画は幻に終わってしまったのだった…。

ところで、カンボジアは内戦によって多くの写真類が焼失したが、クメール芸術アカデミーでは残存している昔の舞踊写真の収集に尽力していた。それは、オーナーがアメリカ人であるゆえアーカイブズが大切であるという進歩的な考えを持っていたからに違いないだろう。



〈左〉ユネスコ・プノンペン事務所 〈右〉(左より)スタッフの方々、筆者、小林教授

韓国「恩山別神祭」の花

伊藤 好英 藝能学会会長

ウンサンビョルシンジェ
恩山別神祭は、韓国忠清南道扶余郡の恩山里で2年に1度行われる春の祭りである。私が見た1996年は、陽暦の3月27日から4月1日（陰暦では2月9日から14日にあたる）の6日間に亘って行われた。日程と祭場は次のとおりである。

第1日目（恩山川からの吸水と神酒醸造）第2日目（^{チンモク}陳木の切り出し）第3日目（花のもらい受け）第4日目（^{ビョルシンダン}別神堂で本祭）第5日目（^{サンダン}別神堂で上堂クッ、^{ハダン}市場で下堂クッ）第6日目（^{トクサンジェ}別神堂の横の岩の前で独山祭、東西南北の村境でチャンスン祭）。

本祭と上堂クッとが行われる別神堂は、集落北端の山際にあり、ここには福信將軍・山神・土進大師の三神が祀られており、別神祭はこの三神に対する祭りである。ちなみに、祭りにとって祭場以外の重要な場所が^{ファジュ}火主の家である。火主は別神堂の神に献ずる供物を準備する責任者で、この家で担当者たちによって神酒の仕込みと肉類以外の供物の調理が行われる。

祭りを執り行なう者の中心は、大將・中軍・司令執事・先陪裨將・後陪裨將・^{ムーダン}領將と呼ばれる6名の祭官で、祭りは全体として儒教的色彩を持つ。ただし5日目は2人の巫堂が中心となって、別神堂と市場の二ヶ所^{クッ}で巫儀を行う。

この6名を中心に、祭りには100名を越える奉仕者たちがいるが、彼等は2日目と3日目に村を離れて盛大な行列を行う。2日目は離れた山まで陳木にするための樹木を切り出しに行き、3日目は8キロ離れた扶余の三忠祠まで神に献ずる造花を取りに行く。この2つの行列に2日間を費やすわけで、樹木と花の移動が別神祭にとっていかに重要なものであるかがわかる。本稿では、そのうち花に焦点を絞ってその祭祀的意義を考える。

別神祭の造花の製作は、^{チファジャン}紙花匠（韓紙で造花をつくる^{たくみ}匠）に依頼する。紙花匠は^{チファバン}紙花房（造花をつくる神聖な部屋）に籠って「紙花」6個と「花燈」6個を1ヶ月ほどかけて造り上げる。図1 出来上がった「紙花」と「花燈」は祭りに先立って寺などの清浄な場所に保管することになっているが、近年ではそれが扶余の三忠祠に固定しており、その花を別神祭の3日目に村から盛大な行列を組んで受け取りに行くのである。「紙花」は、個々の瓶に蓮・牡丹・菊・芍薬・木蓮・海棠の花を挿し合わせたもの、「花燈」は細長い色布をたくさん垂らした燈籠を棒の先に取り付けたものである。「紙花」がメインで、「花燈」はその花を照らす燈りである。

行列が着いた時には、すでに6瓶の花が三忠祠の門前に並べられている。大將以下6人の主要祭官は、その門前に跪き花に向かって拝礼する。図2 この6人が迎えの行列の中心であり、彼等だけが乗馬での往復である。行列が持ち帰った「紙花」



1 紙花房に置かれた「紙花」と「花燈」
（筆者撮影、以下同）

は火主の家に運び込まれ、神酒・供物とともに一部屋に安置される。図3

本祭が行われる日の午後、火主の家から神酒・供物・紙花・花燈が別神堂に運び込まれる。その運搬には、花もらいの行列の人員に加えて供物を運ぶ役の祭服姿の十数人が加わる。一行は集落を巡ったあと別神堂に到着する。その時、彼等は口に白い韓紙を折ったものを咥えて、供物や花に唾がかからないようしている。図4 本祭は夜の9時から12時にかけて行われるが、その前の時間に「肉火主」の家から豚1匹分と鶏3羽分の供物が別神堂に運び込まれる。肉類だけは「火主」の家ではなく、当日「肉火主」の家で調理されて農楽隊のみが付き添って別神堂に運ばれることになっており、その到着を待って本祭が開始される。本祭は儒教式に行われる。祭官たちによる献酒と拝礼と祝文の読誦とがその祭儀の内容である。

以上、別神祭における「花」の扱いを紹介した。さて、このような造花の祭祀的意義であるが、結論のみ述べれば、この造花には、その製作の過程において、また遠方の神聖な場所への設置の時間において、別神堂の神が村人を守るために助けとなる霊力が憑り付くものと考えられよう。そしてその際、「花」を別神堂に運ぶ人々（特に6人）もまた聖なる存在と認識されるのである。ちなみに、祭りが終わったあと「花」は福として村人たちに分け与えられる。

ところで、同じ春の祭りである東大寺二月堂の修二会に須弥壇の四隅に供えられる造花の椿は、儀式が始まる何日も前に別火房で練行衆その他の僧侶たちによって造られ、その後、生の椿の枝先に挿して二月堂に送られ、儀式の初日に壇上に飾られる。薬師寺の修二会で仏壇に飾られる10種の造花は、定まった花つくりの家で長い時間をかけて造られ、儀式の前に上位の僧が清浄な心でこれをもらい受けに行く。このような「花」の扱いは、恩山別神祭における「花」の扱いと類似しており、そこには祭祀の「花」に対する共通の思想を垣間見ることができるのである。



2 三忠祠門前の「紙花」に拝礼する祭官たち



3 火主の家の一部屋に並べられた「神酒」「供物」「紙花」



4 火主の家から別神堂へ向かう行列

民俗芸能のいま

齊藤 裕嗣 東京文化財研究所
(無形文化遺産部)客員研究員

綾子舞は、新潟県柏崎市女谷の高原田と下野に伝承され、女性による踊り、男性による囃子舞と狂言の総称である。踊りは高原田では2人、下野では3人の女性による小歌踊で、現在「小切子踊」「因幡踊」(高原田)、「小原木踊」「堺踊」(下野)など11演目を伝える。いずれも踊り手の舞台登場時の「さし」(出羽)、踊りの中心である「本歌」、退場時の「後歌」(入羽)の3部構成である。例えば「小原木踊」では、3人の踊り手が「小原静原 芹生の里～」の謡にのせて、扇を構えてすり足で登場し、正面に一列に並び扇を翻すと、笛はいり太鼓、締太鼓、胴鉦子、鉦の調子のよい演奏にのせて本歌「イヤ 祇園清水 室町立寄れ 小川清厳寺を 過ぎれども イヤ 今日 売れぬや いーかに里人 木召せ 木を召せ～」の歌にのせ入れ替わりながら踊る。「ハ シャン シャン シャン」の歌が扇の所作と一致し軽やかである。後歌「アレ 出て見さい イヤ これ出て見さい～」にのせて一人ずつ、ゆっくりと退場する。全体で12、3分である。

踊り手は、頭に巻いた赤布を前で結び、残りを後方に長く垂らすユライという赤い被り物が印象的である。高原田では振袖に緋の袴、白足袋、下野は袴はなく、帯をだらりに結ぶ。膝を曲げ腰を深く落とし、「立て扇」「投げ扇」「差し扇」など34種の華麗



「小原木踊(下野)」



「常陸踊(高原田)」



「恋の踊(下野)」

な扇の手を組み合わせて踊りが構成されている。ちなみに例示の「小原木踊」では19種が使われる。

男性が一人で演じる囃子舞は「恵比寿舞」「大黒舞」「亀の舞」など22演目が伝わる。例えば「恵比寿舞」は「～恵比寿舞を見さいな そんもそんも西の宮の恵比寿三郎左衛門殿は～」の歌にのせる楽しい舞である。狂言も男性によって演じられる。能狂言風のものや地狂言風のもの合計33演目が伝わる。「海老すくい」など中央で行わなくなったものもある。

綾子舞は、初期歌舞伎踊をうかがわせる伝承として注目されてきた。綾子舞の「あやこ」は、京都の北野天満宮の巫女「文子(あやこ)」にちなむと伝えるが、歌舞伎踊は同神社境内で始まった。また天正九年(1581)に幼女二人の「ややこおとり(踊り)」の記録があり、このような「ややこ踊り」を慶長八年(1603)に「かぶきおとり(踊り)」と称したことが「歌舞伎」の初見とされる。この「ややこ」も綾子(あやこ)との音通が指摘される。初期歌舞伎踊の衣装や歌詞などは『歌舞伎図鑑(采女草紙)』(徳川黎明会)絵画資料などから、うかがうことができる。それらと綾子舞のユライや扮装、扇を持ち、深く腰をかがめる所作、伴奏楽器などの類似。また「常陸舞」の歌詞が「ややこ踊り」の歌詞と順序は異なるが一致し、さらに出端・入端の構成も共通する。

綾子舞は、柏崎市の中心部から南へ16キロほど離れた黒姫山の麓、鵜川地区女谷で伝承されてきた。この地は豪雪地帯で、柏崎市市街地で積雪50cmの時に同地区では150cmに達したという。このような土地柄であったためか綾子舞は他地域の招きに応じて披露されてきた。文化12年(1815)には江戸浅草寺境内で、また天保5年(1834)に江戸の大名屋敷で演じた記録がある。明治以降も招きに応じて各地で演じるほか、戦後は毎年9月15日に地元・黒姫神社祭礼で公開され、現在も9月中旬に現地公演されている。鵜川の人々が大切に伝承されてきた綾子舞によって、17世紀初めの歌舞伎踊りの姿を、いま、ありありと目の前に見ることができる。



囃子舞「肴さし舞(高原田)」



狂言「掏摸(高原田)」



アーカイブの部屋に飾られていた猿役の名人の写真



猿役の名人の孫弟子にあたる団員

写真提供：丸茂 美恵子

舞踊文化 E T C No.32 2023年5月10日発行
 発行人 三隅 治雄 編集人 黛民族舞踊文化財団事務局
 〒107-0052東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F
 TEL 03-3583-3633 / FAX 03-3583-3639
 ホームページ <http://www.mayuzumi.or.jp>
 一般財団法人黛民族舞踊文化財団